

風土記の丘の花だより²³²

今、そしてこれから見られる植物(2024年4月20日)

春だというのに、先日、夏日を記録しました。これから日に日に暖くなり、野山にたくさんの花が咲く季節になっていきます。足もとの小さな花にも、見上げる木に咲く花にも目を向け、楽しい山歩きをしていただきたいと思います。そろそろ熱中症対策として飲み物や帽子なども忘れないようにしてくださいね。



パッと見たら、花が咲いているように見えますが、これはアカメガシワという木の若葉です。多くの木の若葉は「新緑」といわれるようにみずみずしい緑色ですが、この木の若葉は「赤芽柏」という名前の通り真っ赤です。「かしわ」とは「食べ物を包むもの」という意味の言葉だそうです。この大きくて柔らかい葉でご飯を包み、お寿司にする地方もあります。そのものズバリのカシワという名前のブナ科の木が風土記にもありましたが、数年前に枯死しました。残念！



万葉植物園を過ぎて花木園を右に見て歩くと、斜め右に入っていく細い道があります。それを入れてすぐ右側にミツバウツギの木が1本だけあり、今きれいな花が咲いています。白くてほのかに香る花です。自生ではなく、どなたかが植えてくれたものだと思います。葉は3枚一組で「ミツバ」という名前の元になっています。ウツギは「空木・うつろな木」という意味で枝の中が空洞になっている木によく用いられる言葉です。ウツギ、すなわち卯の花の仲間ではなく、ミツバウツギ科です。



このノボロギクは町中では至る所に生えていますが、ここ風土記の丘では探しにくい雑草です。ですから、ここで探さずに、お帰りになってから、お家の周りを探した方がよさそうです。ボロは「ぼろ布」のことで、綿毛が雨に濡れるとそのように見えることから名付けられました。花の付け根に小さな黒い三角模様が並んでいるのが特徴です。ひらひらした花びらはありません。こんな花を筒状花といい、キク科の花によく見られます。イヌガラシの黄色い花が咲いています。日当たりが良く少し湿った所ならどこでも見ることができます。「イヌ」は「役に立たない」という意味の接頭語で、イヌガラシは「役に立たない辛子」すなわち辛い辛子ということでしょうか。試してみようにも、種子はとても小さくて、私はまだ試食できていません。アブラナ科の植物で、花は菜の花やダイコンなどと同じで、4枚の花びらがあり、上から見たら十の字に見えるので、十字花と呼ばれます。



次回233号の発行は、4月29日(月)になります。27日の土曜日ではありませんので、ご了承ください。

松下